



レイダー・シェルセン◆絵
池田香代子◆訳

ヨースタイン・ゴルデル◆著





ハロー?

1997年6月25日 第1刷発行

著者——ヨースタイン・ゴルデル

イラストレーター——レイター・シェルセン

訳者——池田香代子

発行者——安藤龍男

発行所——日本放送出版協会

〒150-81 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 03-3780-3319(編集)

03-3780-3339(営業)

振替 00110-1-49701

印刷——日本写真印刷

製本——石津製本

乱丁、落丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

Japanese Edition Copyright ©1997 Kayoko Ikeda

Printed in Japan

ISBN 4-14-080308-8 C0097

〔日本複写権センター委託出版物〕本書の無断複写(コピー)は、
著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。



ヨースタイン・ゴルデル◆著

トマス・シムルゼン◆絵 池田香代子◆訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



NHK出版

装幀・本文デザイン◎藤田知子・坂川栄治(坂川事務所)

HALLO?—ER DET NOEN HER? by Jostein Gaarder

Copyright © Gyldendal Norsk Forlag 1996

Japanese translation rights arranged with Gyldendal Norsk Forlag through
Japan Foreign-Rights Centre

空



5

海



61

山



101

夜



131

家



37

庭



19

卵



83

シルクハット



147

空

親愛なるカミラ

この十月、きみは一週間、ぼくの家に泊まったね。秋休みをまるまるきみと過ごせたなんて、すてきだったな。入り江で蟹をとったこと、きみはまだおぼえているね？ それから、ぼくの大型天体望遠鏡。きみはいま、あれをのぞけないので、つまらないなって思っているんじゃないかな。だってきみは、毎晩のように、あの望遠鏡をのぞきたがったものね。一晩だけは曇っていた。あの夜は、キッチンでいっしょにパンケーキを焼いたっけ。

ぼくの約束はおぼえているね。きみのために物語を書く、という約束だ。これから、あの約束をはたそうと思う。

きょう書きはじめるのは、何日かまえ、きみが八つになったからだ。ぼくは八つるとき、妹か弟がうまれることになったんだよ。でも、きょう書きはじめる理由はまだある。その理由というのは、すごいニュースでもあるんだけど、これについてはまたあとで。それよりも、まずはミカのことから話そう。そのほうが、きみにはわかりやすいだろう。

ぼくはなにもかもを、まるでついきのうのこのようによくおぼえている、というつもりはない。でも、そのほとんどを、まるでおとこのことだったようにはおぼえている。きつと、忘れてしまったこともあるだろうし、ぼくが勝手につくってつけ足したこともあるだろう。それは、ずうっと昔におこ

ったことを物語ろうとすると、よくあることなんだ。

はじまりはどんなふうだったか、それはよくおぼえている。きみは、そんなはじまり方なんてありふれてる、というかもしれない。そりゃあ、もうすぐ弟か妹がうまれる、というのはよくあることだよ。だけど、それってそんなにありふれたことなのか？ いちばんありふれたことが、ぼくたちの思うほどありふれてはいない、ということ、よくあることなんだ。

あのころ、ぼくのうちでは庭にわでにわとりを飼かっていた。にわとりなんてありふれてるって？ まあ、それはそうだ。ぼくだって、ありふれていると思っていた。ミカを知るまではね。

さあ、想像そうぞうしてごらん。きみは宇宙飛行士うちゅうひこうしで、たったひとり、宇宙を旅うちゅうしてるんだ。あっちに行ったり、こっちに行ったり、宇宙をくまなく飛び回とっている。でも、そうやって長いこと、そう、永遠えいえんの半分ものあいだ旅したとしても、たった一羽ひとわのにわとりでも見つければ、きみはものすごくラッキーだ。

宇宙うちゅうには、数えきれないほどたくさんの星がある。なかには、ひとつかふたつの惑星わくせいをしたがえている星もある。何年も何年も宇宙を旅すれば、いつかは、いのちある惑星わくせいにたどりつくかもしれない。それでも、にわとりを見つけるチャンスはほんのわずかだ。卵たまごを見つけるチャンスなら、もうすこし



あるかな。もちろん、その卵たまごからひよこがはい出すとは思わないけど。

にわとりは、ぼくたちの地球ちきゅうにしかないんだよ、きっと。宇宙うちゅうはとほう

もなく大きいのに！ だから、にわとりは「ありふれて」なんかないんだ。

にわとりといえば、そうだ、にわとりは

ほとんど毎日、卵たまごをうむね。そんな鳥とか

動物を、きみはほかに知ってる？

ミカの物語をこんなふうにはじめたのは、ぼくはミカのおかげで、ありふれたものなんてひとつもない、という

ことを知ったからだ。

だれかが「どうってこと

ない一日」なんていって

いるのを聞くと、ぼくはむっ

としてしまうな。まったくお

んなじ日なんて、ありっこない

のに。だいいち、ぼくたちのい



のちがあと何日残のこっているのかだって、わからないのに。

「ありふれた」にわとりや、「どうってことない」一日なんていうよりもつとひどいのは、「ありふれた男の子」とか、「まあ、どうってことない女の子」なんていうことだ。そういうのは、相手あいてをもっと知りたいという気のないいい方だもの。

とにかく、ぼくに妹が弟ができることになった。どっちだろうって、うちではそのことでもちきりだった。ぼくは、ママの大きなおなかに入っているのは、ぜったいに弟だと、てんから信しんじていた。なぜかはわからない。たぶん、どっちかといえど弟のほうがいいな、って思っていたからだろう。

ぼくたち人間には、そうだったらいいな、って思うことを信しんじてしまおうところがあるらしい。弟ができるってどんな感じかんのことなのかだって、想像そうぞうするのはむずかしかった。でも弟なら、すこしはぼくと似にたところがあるだろう。妹なんて、とてもじゃないけど想像そうぞうできなかつたんだ。

ママがいった。赤ちゃんは、ママのおなかのなかで頭を下したにしていって、青あざができるほど強くおなかをけつとばすって。そう聞いて、ぼくは、元気な弟だなあ、と思った。そのとき初はじめて、弟をちよつと注意ちゅういしてやりたいと思った。これから、いろいろ教えてやろう。だれだって、この世界にやつてきたときは、お行儀ぎようぎなんかぜんぜん知らない。ぼくたちは何年もかけて、ま

わりの人への思いやりを学んでいくのだ。

弟にしても、まるであたらしい世界にやってくるというのは、きつとへんてこなことだろう。弟もたいへんだよ。だって、なにからなにまで、慣れなければならぬんだから。それに弟は、いまいる暗くて狭いところの外はどんなふうになっているのかな、なんて、これっぽっちも考えてないだろうし。いろんなことをどうやって弟に説明してやろうかと、ぼくはもう計画をねりはじめていた。この世界がどうなっているか、弟に話してやるのはぼくの役目だ。

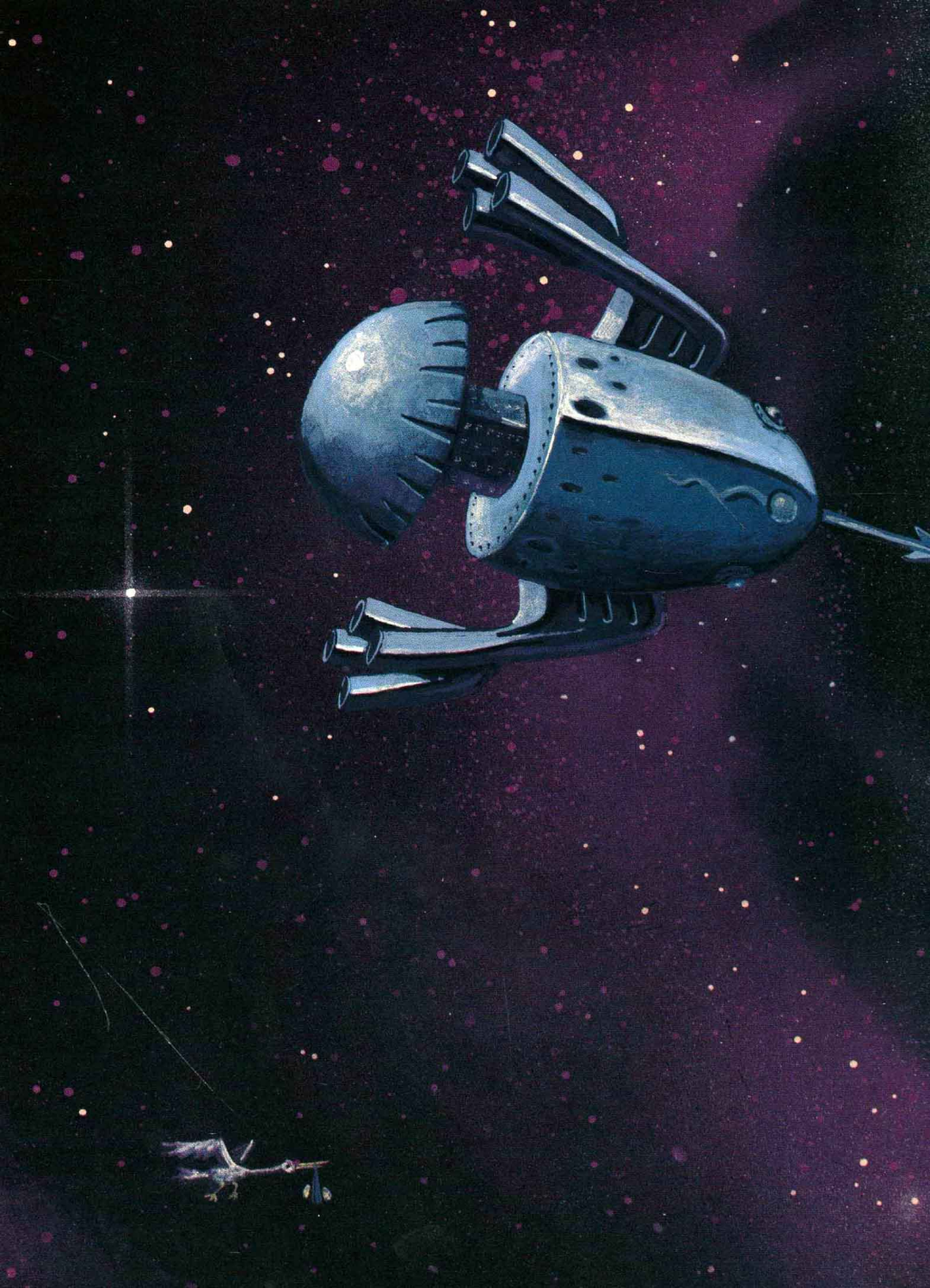
弟はまだこの世界にいない。太陽も星も、野原の花も動物も、見たことがない。だから、花や動物の名前も知らない。ぼく自身も、いっぱい勉強しなければならなかった。たとえば、ジャガーとピューマはどうか知らなかったし。いまは、ジャガーはピューマよりもちよつと大きいって知っているけど。でも、それだけじゃない。この惑星には、何千もの種類の動物がいるんだ。弟に犬と猫はどうちがうかを説明するのだって、たいへんだっていうのに。

人間は何千年もかかって、植物や動物にかたっぱしから名前をつけたけれど、この仕事はまだ終わっていない。だから、それをぜんぶおぼえようと思ったら、ぼくたちのたった一度の人生なんかじゃぜんぜん足りない。

弟は、初めて地球におり立つ宇宙飛行士のようなものだ。

「ハロー？ だれかいますか？ それともこの星には、だれもいないんですか？」

「青い惑星！ まるでキャンディみたい！ これはひょっとして、いのちある惑星？」





ぼくは八つになったばかりだった。それは夜中^{よなか}にはじまった。ぼくは、夢^{ゆめ}をみていたように思う。なにか、すごくわくわくする夢^{ゆめ}を……

「起きろ、ヨアキム」パパがいった。「いまは真夜中^{まよなか}だけど、赤ん坊^{ぼろ}はそんなこと、おかまいなしだからな。赤ちゃんが、もうママのおなかのなかにいるのはいやになったらしい」

ぼくはベッドの上に座^{すわ}った。

「弟^{あそ}がうまれるんだね？」

目がさめたばかりだし、部屋^{へや}も暗^くかった。でもぼくは、あるとき自分がいったことを、はつきりとおぼえている。

パパがたずねた。パパとママは病院^{びょういん}に行くけど、ひとりで留守番^{るすばん}できるね？ パパは、ついたらすぐに電話^{でんわ}をする、ぼくを起^おこすまえに、ヘレネおばさんに電話^{でんわ}しておいた、ともいった。おばさんは、始発^{しはつ}のバスで来るという。

ひとりでだいじょうぶだよ、とぼくはいった。

「レゴで遊^{あそ}んでる」

ひとり遊^{あそ}びに、レゴはびったりだ。いつも、大きな宇宙^{うちゅう}ロケットをつくった。いろいろ空想^{くうそう}しながらね。そのころはまだ、ロケット用のセットなんて売^うってなかったんだ。